

お わ り に

---

教科書展20回の回顧と展望



## 創立130周年の教育学部の旧教科書蔵書

滋賀大学図書館教育学部分館には、明治初期から昭和戦前期までの約8500冊の旧教科書と、戦後の教科書約8500冊の合計1万7000冊余の教科書を所蔵している。とくに、明治初期から昭和戦前期までの旧教科書蔵書は、質量ともに全国でも有数のコレクションであると評価されている。

滋賀大学教育学部の前身は、1875（明治8）年創立の滋賀県小学教員伝習所であり、のち大津師範学校、滋賀県師範学校と改称されていき、戦後の1949（昭和24）年に経済学部と統合して、滋賀大学学芸学部となる。1966（昭和41）年に教育学部と改称し現在に至る。去年で創立130周年を数えた歴史を持つ教育養成学部である。

教育学部分館に旧教科書が多く所蔵されたのは、次のような理由からである。明治初年に、彦根藩校弘道館の蔵書多数が滋賀県に移管され、師範学校に附設された滋賀県書籍縦覧所がこれを引き継ぎ、縦覧所は漢籍、和本を一般公開するとともに、同時期の教科書収集に心がけた。また、戦前の滋賀県師範学校の附属図書館が体系的に明治初期からの教科書を熱心に収集してきた。戦後になり、師範学校、女子師範学校の蔵書整理と併行して、旧教科書の目録づくりと教科書調査が教育学関連の教員と図書館職員との協力で行われて、さらに蔵書保存に努めてきた。

教科書資料保存のこんなエピソードがある。戦後直後に多くの教員から「戦時中の書物は教科書も含めて、進駐軍に見つからないように処分した方がよい」という意見が出る中で、「こんな重要な資料は必ず珍重される日が来るので、絶対に残しておかねばならない」とある教育学の教員が強力に主張され、貴重な教科書類が保存された。歴史的資料の価値を信じて、的確な見通しを持たれた先輩教員がいたのである。その後10数年を経てから、夏休み中に汗の噴き出る図書館倉庫に入り込んで、教職員と学生が旧蔵の在庫教科書を教科別、発行年別に整理してカード化する作業が行われた。

## 20年を迎えた教科書展の一般公開

1985（昭和60）年7月より、教育学部附属図書館は所蔵教科書の一般公開を行ってきている。第1回の教科書展示は、「明治・大正期の教科書展—国語教科書のあゆみ—」であった。以後、毎年異なるテーマで20年間、教科書展示会と教科書公開を行い、地域社会の住民はもとより、幅広く一般のかたがたへ、戦前・戦後の教科書を手にとって見ていただく機会を提供してきた。2005（平成17）年は、教科書展示を教育学部分館と滋賀大学大津サテライトプラザの2カ所で行い、大津サテライト会場では記念講演を含む20回記念行事を開催した。

これまでの教科書展を振り返ると、およそ3つの時期に区分することができる。

第1の時期は、明治期から昭和戦前期の旧教科書の公開展示である。明治初期の自由発行情、検定期、国定期の所蔵教科書を各教科ごとに、1985（昭和60）年から1994（平成6）年まで順次公開していった。国語（第1・2回）、算数・理科（第3回）、修身・歴史（第4回）、地

理・郷土地誌（第5回）、音楽・美術（第6回）、家庭（第8回）、農業・商業・簿記・会計（第9回）である。なお、簿記・商業では経済学部教員の協力をえて展示を行った。

第2の時期は、教科とは異なるテーマを設けて、関連する教科書展示を行った。湾岸戦争の翌年1992（平成4）年の平和教育（第7回）、戦後50年目の1995（平成7）年の「終戦前後」（第10回）など時代を意識したテーマを設定したり、1996～1998（平成8～10）年には滋賀県の地域性を意識的にとりあげた近江の人物（第11回）、近江八景（第12回）や、江戸時代の往来物・明治初期の翻訳教科書（第13回）などの展示を行った。

第3の時期は、昭和戦後期から平成期の現在までにかけての教科書を、教科ごとにとりあげた。1999（平成11）年から2005（平成17）年まで、国語（第14回）、習字（第15回）、算数・数学（第16回）、理科（第17回）、社会（第18回）、音楽・美術（第19回）、思い出の教科書、特別記念教科書（第20回）である。

上記の毎年の教科書展示にあわせて、『図書館だより』を教科書展特集号として刊行してきた。『図書館だより』には、展示教科書の解説を行うという役割が主であるが、たんに教科書解説にとどまらず、教科書を通して近現代日本の教育のあゆみを解説している。執筆者は教育学部の教科教育学の教員スタッフが中心であり、教科書を通して教育の姿を考察したものであった。当初は、各教科の教科書の簡単な説明であったが、近年は教科教育の歴史と教科のあり方を考察するようになってきた。

## 本書の刊行の意義と特色

本書は、滋賀大学付属図書館の教科書展示会特集の『図書館だより』を基礎として、これに修正・加筆して成立したものである。『図書館だより』教科書特集号には、1985年より2005年まで20年間に全体で39編の論稿が掲載されており、執筆者は教育学部教員19人、経済学部教員5人、図書館職員1人の合計25名が執筆している。滋賀大学をあげて貴重な蔵書の教科書展示と公開事業を行ってきており、展示教科書の解説資料も全学の教職員の協力で行ってきた。

今回の編集にあたって、次のような3点に留意して特色づけて、3部構成にした。

第1に、近現代日本の教科書のあゆみをわかりやすくつかめるようにする、第2に、教科別に教科書を解説して、教科の歴史がとらえられるようにする、第3に、地域にかかわる滋賀県の人物や近江八景、近江の郷土教科書など、地域と教科書のかかわりを明らかにする、の3点を考えた。本書の構成は、第1部では明治初期から昭和戦前期までの戦前教科書編、第2部では戦後直後から現在までの戦後教科書編、第3部では旧教科書にみる近江関係の教科書編とした。

『図書館だより』の教科書特集号の論稿39編のうちから、編集委員会で27編を選んで編集した。本書は、自分の興味や関心のある頁のどこから読まれても結構かと思われる。また、教科別に教科書を配置しているが、自分の問題としたいテーマをもとに各教科の教科書を横断的に

読んでもよい。たとえば、墨塗り教科書に関心を持たれば、どの教科にも叙述が出てくるはずであり、国定教科書と一口にいても各教科を比べてみると、画一的でないことがわかってくる。国定の習字教科書には2タイプの流派の異なる教科書があったことや、修身科では男生用と女生用の存在、農村用と都市用、複式編制学校用教科書の存在など、教科によりかなり異なる国定教科書の様相があったことがわかる。

本書は、教育学部の教科教育学の教員スタッフが総力をあげて資料解説を執筆しているので、一般のかたがたはもとより、学生や院生、現場の先生方にも参考になるであろう。本書は、教科書の解説として、できるだけ図版や表を多くとり入れて、戦前・戦後の教科書のイメージをもっていただけるように配慮した。今回、200種類の教科書の図版181点と表29点を本書に入れたことは、他の類書にはない特色であると思う。

なお、『図書館だより』は20年間の長い時期にわたっており、各号の執筆時点と現在とでは多少の点で問題把握が異なったりしている点をお断りしておきたい。できるだけ執筆者にご協力いただいて修正・加筆に努めたが、執筆者25名のうち12名は定年退職され、2名は転勤され、1名は故人であるので、編集委員会の責任で補筆したが、どうしてもできなかった点もあり、その限界は免れない。現役の教員9名には、全体調整したうえで修正していただいた。

## 本書から教科書の何が見えてくるか

どんな人も子ども時代に教科書を鞆に入れて学校に通い、学校の授業では教科書を出して、先生から教えてもらった体験をしている。子ども用図書の少なかった戦前の学校体験をしている人には、国語読本や算術などの国定教科書の体験は忘れがたいであろう。教科書展示会では年輩のかたがたが、なつかしく自分の習った時代の国定教科書を手に取り、実にていねいに読まれている光景を何度も目にしてきた。

戦後においても、墨塗り教科書の体験世代や、暫定教科書使用の世代、文部省著作教科書を使った世代、比較的ゆるやかな多様な幅のあった検定教科書を使った世代、また検定が強化されて、書かせる検定後の教科書を使った世代、最近のようなカラー図版や表、コラムや漫画的な図の入った教科書使用世代など、私たちはそれぞれの時代にそれぞれの異なる教科書体験を、学校生活の思い出とともに持っている。

自分の使った個別の教科書体験は、それぞれの人にかげがえのない貴重な体験であるが、こうして明治初期から現代までの日本の教科書を比較検討していくと、自己の個別教科書体験をこえた、多くの日本人の多様に異なる教科書体験に出会うことができる。実に多様な異なるさまざまな世代がそれぞれに異なる学校文化を体験してきていることに気づかされるのである。世代間のギャップということは、実は異なる学校文化間のギャップであるともいえるのではないか。

このように本書の第1部と第2部からは、自分の使った教科書から自分の育った時代や社会

が見えてくる。さらに他の日本人の使った教科書へ関心を広げるにより、日本の近現代史の社会と密接にかかわった学校教育が見えてくるし、近現代の日本社会の歴史がうきぼりにされてくる。そこから、学校生活で共通の有力な教材としての教科書は、未来の社会ではどうあったらよいのかを考えるきっかけをつかむことができるのである。

### 旧教科書にみる近江の人物、近江八景

本書の第3部には、近江の人物や近江八景などの滋賀県の地域性が戦前の旧教科書には、どう現れているかを述べている。教育学部分館所蔵教科書に限定して調査したものではあるが、一図書館職員がこつこつと一冊一冊目を通して調査したものである。1996年度の『図書館だより』には、本書所収以上に多くの近江の人物を、3053冊から調査して報告しているが、頁数の都合で本書では14人を省かざるをえなかった。本書には、「近江聖人中江藤樹」、現在の話題の「山内一豊の妻」、戦国武将の「蒲生氏郷」、朝鮮通信史と関係深い「雨森芳洲」をあげている。

また、近江八景について、旧教科書の国語、地理、唱歌の1785冊を調査して、地理46冊、国語13冊、唱歌11冊の合計70冊に図・語句・文章が見られることを発見した。明治初期の教科書から散見され、明治中期の検定教科書に多く見られ、国定教科書にも掲載され続けていることもわかった。さらに、本館所蔵の『近江輿地志略』、『閑田耕筆』、『永代節用無尽蔵』の文献や『近江名所図会』などの名所図会・版画の調査を行った。

戦前の教科書には、こうした地域の人物や事象が意外に豊かに扱われていたことや、最終章には近江の郷土性に立脚した旧教科書の編纂や刊行が、明治初期から中期にかけて盛んであった事実をあげている。偏狭な郷土愛ではなく、また偏狭な国家主義に陥らない教科書編纂とはどうあるべきかを示唆するものであろう。

本書が多くのかたがたに手に取っていただいて、近現代日本の教科書の変遷を正しく理解してもらうとともに、将来の日本の教科書づくりや叙述内容に深い関心を持たれることを期待する。

最後に、編集にあたって旧漢字を新漢字に改めたこと、現代かなづかいにしたこと、難解な漢字にふりがなをつけたことを付記しておく。編集業務及び所蔵教科書の調査と撮影にあたって、図書館職員の方々の多大な協力に心から謝意を表する。

2006年10月

滋賀大学附属図書館出版編集委員会

委員長 木 全 清 博